

ジャック・シラクの美術館構想に関する一考察

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2010年10月1日 受理)

1. はじめに；「シラクのミュゼ」

2006年6月、パリのエッフェル塔のふもとに、ポンピドゥー・センターから30年ぶりに国立の美術館が開館し、世界の注目を集めた。その名はケ・ブランリー美術館で、ケ（河岸）とブランリー（フランスの物理学者エドワール・ブランリー）に由来する（図1）。30万点にも及ぶ収蔵品は、セーヌ川をはさんで向かい側に位置するシャイヨー宮

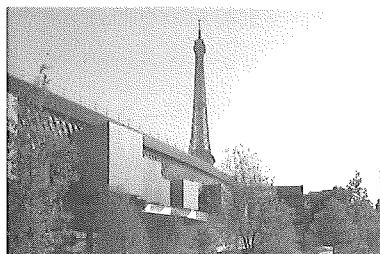


図1 ケ・ブランリー美術館外観

内の人類博物館と、パリ東部のヴァンセンヌの森に隣接していたアフリカ・オセアニア美術館（MAAO）の所蔵品から吸収したコレクションを中心に、新規購入や寄贈などにより新たに収蔵品が加わり構成されている。建築設計はジャン・ヌーヴェルによるもので、2万5千平方メートルの敷地内には、セーヌ河岸に最も近いブランリー棟（事務所棟）からユニヴェルシテ通りに向かって、オヴェン棟（メディア棟）、美術館棟、ユニヴェルシテ棟（ミュージアム・ショップと修復のアトリエ棟）の4つの主要な建物が立ち並ぶ。庭はランドスケープ・デザイナーのジル・クレイマンが手掛け、数年後には、各ギャラリーの壁面が成長した木々に覆われるように、美術館棟の前に所蔵品の故郷の原生林が植栽されている。また、ブランリー棟の北側のファサードには、植物学者パトリック・プランによる「垂直庭園」がほどこされている。そして、アーティストのヤン・ケルサレによる、地面に設置された千本を超える発光ダイオードの照明のインスタレーションが、幻想的な夜の風景を作り出す。

来館者は、美術館棟の1階のエントランスからゆるやかにカーヴを描く長いスロープを登ったのち、薄暗いトンネルを抜けると、横長の船のような形をした2階の常設展示エリアにたどり着く（図2）。そこにはアフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカの仮面、彫像、テキスタイル、楽器、武器、装身具等、所蔵品全体の1割程度、約3,800点が、繊細なスポットライトの効果により、それぞれの造形美を最大限に引き立たせるよう、

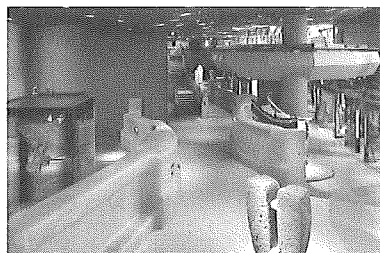


図2 常設展示室入口

暗闇のなかから浮き上がるように展示されている (図3)。

また、地下1階から地上3階までフロアを突き抜けて立つガラス張りの塔は、9,500もの楽器を収納した収蔵庫である (図4)。その他1階には「ジャック・ケルシャシュ図書閲覧室」、地下1階には「クロード・レヴィ=ストロース劇場」がある。さらに3階には、テーマ別展示のためのギャラリーとマルチメディア・ギャラリー、そして、4階にはメディアテークと、エッフェル塔が窓越しに見えるレストランがある (註1)。

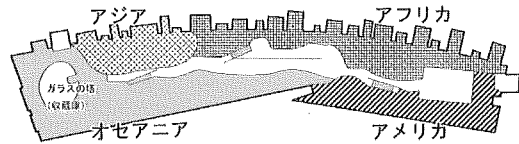


図3 ケ・ブランリー美術館常設展示室

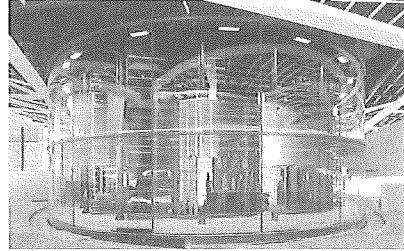


図4 ガラスの塔 (収蔵庫)

2006年6月20日、ジャック・シラク大統領は、華々しくケ・ブランリー美術館の開会式を行った。来賓には各国の美術館関係者や、クロード・レヴィ=ストロースをはじめとする人類学者、また、コフィー・アッタ・アナン国連事務総長も招かれ祝辞を述べたのち、シラク自ら演説を行い、「世界の芸術や民族の間にヒエラルキーは存在しない」と「文化を超えた対話」の場としての新美術館の役割を強調した。同様の内容のシラクのメッセージが、この新しい美術館を紹介する場合にしばしば繰り返されており (註2)、現職大統領の強いイニシアティヴによって設立されたケ・ブランリー美術館は、フランスではしばしば「シラクのミュゼ (美術館)」と呼ばれる。本稿では、シラクの美術館構想とその歴史的背景について論じる。

2. ケ・ブランリー美術館設立の経緯

(1) バリの美術館・博物館再編

ここでケ・ブランリー美術館の起源である、人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館 (MAAO) を中心に、それらに関連したシャイヨー宮 (かつてのトルカデロ宮) とポルト・ドレ、及びパレ・ド・トーキョーにおける美術館・博物館再編の歩みをたどってみたい (註3) (図5)。

人類博物館の前身は1878年、パリ万国博覧会のために建設されたトルカデロ宮でフランス民族に関する民族誌資料が公開され、1881年、トルカデロ民族誌博物館として公開されたことにさかのぼる。その後、1937年のパリ万国博覧会の会場として、トルカデロ宮を取り壊して新たにシャイヨー宮が建設されるとともに、民族学者ポール・リヴェとジョルジュ=アンリ・リヴィエールが中心となり、130平方メートルの手狭なトルカデロ民族誌博物館に代わって人類博物館を南翼に設立し、国立自然史博物館の古生物学と民族学に関するコレクションもそこに移した。

さらにリヴィエールは、トルカデロ民族誌博物館のフランス展示室のコレクションに基づき、国立学術研究センターとの提携による新たな民芸民間伝承博物館の構想を考案した。コレクションはシャイヨー宮のフランス記念建造物博物館にとどめられたのち教育省の管轄下となり、1972年、パリ西部のブローニュの森によく国立民芸民間伝承博物館（MNATP）が建設された。しかし、入館者数は減少し続け2005年に閉館し、マルセイユに2013年、開館予定のヨーロッパ・地中海文明博物館に吸収されることとなった。

また、1790年、プティ・オーギュスタン修道院内に作られたフランス記念建造物博物館も、1937年、シャイヨー宮の東翼に移設されている。その前年、アンリ・ラングロワによりパリ8区に設立された最初のシネマテーク（映画博物館）が1963年、文化大臣アンドレ・マルローによりシャイヨー宮に移設され、2005年に閉館するが、同年、パリ東部のベルシー地区に、フランク・ゲーリーが設計を担当したアメリカ・センター（1994年設立）の斬新な建物のなかに最新の設備を備えて移り、開館した。さらにシャイヨー宮東翼は2007年、フランス記念建造物博物館とエコール・ド・シャイヨー（1887年設立）を備え、建築の現代的な傾向に焦点をあてた建築と遺産センターとなる。

先史・形質人類学・民族誌の3つの部門からなる人類博物館は開館以降、自然史博物館の一部としてシャイヨー宮の南翼にとどまり、第二次世界大戦が勃発すると、ポール・リヴェ館長の指揮下により、博物館内にナチスの人種差別政策やファシズムに抵抗するレジスタンス組織が形成されたこともあった。戦後、教育省下に組み入れられたが、その後、行政組織から解放されて先史・形質人類学・民族誌の3つの部門の研究所となった。しかし、長く続く財政難と遅々として進まない組織改革により、旧態依然としたまま人員は削減され、入館者数も減少し続けた。

1989年、ミッテラン大統領は人類博物館の大改造計画を発表するが実行されず、1990年代、続くシラク大統領もまたパリ市長時代、リニューアルを計画するが、財政上の問題により実現できず、ケ・ブランリー美術館設立が決定されると、人類博物館の民族学、アフリカ、アメリカ、アジアのギャラリーは閉鎖され、現在、ようやく改築工事が進んでおり、リニューアル後の開館は2012年の予定である。

ちなみに第二次世界大戦中、1943年にルーヴル宮殿内のルイ15世の船泊模型と海軍工廠の機械コレクションを起源とする海洋博物館が、シャイヨー宮に建設されている。また、1937年のパリ万国博覧会を機に、物理学者ジャン・ペランの発議により、パリのグラン・パレに「発見の殿堂」が設置され、同年、国とパリ市が所有する近代美術のためのコレクションを公開するため、現在のパレ・ド・トーキョーが建設され、1940年以降、その東翼にパリ市が所有する近代美術のコレクションが公開され、1942年、西翼に国立近代美術館が開館し、1947年、ようやく全面開館した。

その後、1961年、東翼にパリ市近代美術館が開館するが、1977年にポンピドゥー・センターが設立され、そこに国立近代美術館が移設されると、西翼は一時的に国が所有する現

代美術コレクションが置かれ、国立写真センターが設立され（1984-1993年）、また、建築コンクールも開催されるが、1995年以降は使用されず、2002年から現代造形センターとして建物もリニューアルされ、夜間まで公開されている。

その一方で、1931年5月から11月にかけて、パリ東部に広がるヴァンセンヌの森でパリ万国植民地博覧会を開催するにあたり、恒久的な施設として、ポルト・ドレに植民地の原住民に関する展示を行うための植民地博物館が設立された。この博物館は1935年に海外フランス博物館となり、①フランス文学・美術における異国趣味 ②十字軍以来のフランス拡張政策の歴史 ③土着の芸術 ④フランスの人道主義的役割（経済社会部門） ⑤熱帯水族館の5部門を通して、フランス植民地の政治、経済、文化、自然史を紹介することを目的としていた（註4）。

以後、時代にそぐわなくなったため、1962年、アンドレ・マルローによってアフリカ・オセアニア美術館に改編され、これまでの植民地省から文化省の管轄下におかれ、1990年、正式に国立の美術館となったが、そのコレクションをケ・ブランリー美術館に吸収させることによって、2003年、閉館した。同年、移民の調査と歴史のための博物館を設置することが正式に定められ、2007年10月、ポルト・ドレ宮殿は国立移民史博物館として生まれ変わり、現在に至っている。

(2) ケ・ブランリー・プロジェクト

1998年7月14日、シラクはフランス革命を記念するガーデンパーティーの席上で、セーヌ左岸の2万5千平方メートルの国有地に、「人間と芸術と文明の博物館」を建設することを公式に発表した。次にこの決定に至るまでの経過を追ってゆく。

1995年、シラクはArts Premiers（註5）による美術館を建設するための委員会を発足させており、同年、文化大臣フィリップ・ドゥスト＝ブラジエは、その導入としてルーヴル美術館にArts Premiersのための部門を設けるため、委員会を設立することを発表した。名誉委員長はクロード・レヴィ＝ストロース、委員長はジャック・フリードマン、顧問はシラクの友人で収集家のジャック・ケルシャシュであった。

そして、翌年、この委員会で、美術館か人類博物館かというこれまでのカテゴリーに当てはまらない、新たな「人間と芸術と文明の博物館」を2001年末か2002年に開館し、常設展示室に図書館、メディアテーク、オードトリウム、映画館、劇場、企画展示室を併設すること等、そして、1999年後半、別館としてルーヴル美術館に150-200点の作品を展示すること等、すでに計画している。

最初の大きな問題は敷地の決定だった。委員会で支持された最初のプランは、人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館のコレクションをシャイヨー宮に移動して、新たな美術館を西翼に建設するという案だったが、スペースが狭いという理由から廃止された。そのため、次に、西翼のスペースを拡張するため、すでにあった海洋博物館をパリ東部のポル

ト・ドレに移設するという案が出されたが、それも廃止された。その後、文化大臣カトリーヌ・トロットマンは、シャイヨー宮西翼にある海洋博物館はそのままにし、人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館のコレクションをパレ・ド・トーキョーに移動し新たな美術館を設立する案を提出するが、これも賛同されなかった。

ようやく最終案として1998年7月、現在のケ・ブランリー美術館の敷地に決定し、完成までの責任者として、前国立近代美術館館長のジェルマン・ヴィアットが就任したことが公式に発表され、翌年、建築コンペが行われ、フランス人建築家ジャン・ヌーヴェルが担当することとなった（註6）。

また、1998年、「Arts Primitifs（註7）は美術品として質が劣る」と考えるルーヴル美術館館長を筆頭に、学芸員たちが強く反対したにもかかわらず、ルーヴル美術館内のパヴィヨン・デ・セッションに、Arts Primitifsのための常設のギャラリーを設けることが、正式に決定された。そして、リニューアルのための工事の責任者に建築家ジャン＝ミッシェル・ヴィルモットが指名され、2000年4月、アフリカ、オセアニア、アジア、アメリカから120点の作品が、セーヌ川に面したギャラリーで公開された（図6）。

その一方で、ケ・ブランリー美術館に人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館のコレクションの大部分がほぼ強制的に吸収され、活動休止に追い込まれることとなった事態に対し、特に国内外の人類学者たちから批判が巻き起こった。

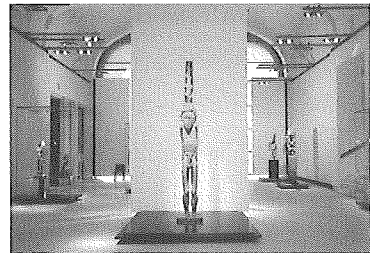


図6 パヴィヨン・デ・セッション（ルーヴル美術館）

2001年4月、「国家遺産のレジスタンス」と名づけられた委員会が公式に結成され、人類博物館の職員のうち90パーセント以上がストライキに参加するなどの抗議を示したが、政府の決定を覆すには至らず、同年、ケ・ブランリー美術館の工事が始められ、コレクションも新規購入と寄付が行われることによりさらに充実し、また、アフリカ・オセアニア美術館と人類博物館の図書資料も、メディアテークのために集められた。2004年12月、ジャン・バプティスト通りに一時保管していたコレクションが、完成したケ・ブランリー美術館の建物に移動し、翌年、常設ギャラリーにおける作品展示や収蔵庫への収納作業も進められ、マルチメディア・プログラムも完成したのち、2006年6月23日、ようやく開館の日を迎えた。

3. ルーヴル美術館とArts Primitifs

(1) ルーヴル美術館と《非ヨーロッパ》コレクション

共和国の一周年記念日にあたる1793年8月10日、国民公会により、ルーヴル宮殿に「中央芸術博物館」（Muséum Central des Arts）が設立された。この日、ルーヴル美術館は公式に誕生し、同時に、科学分野専門の自然史博物館と、歴史専門のフランス記念物博物館、さらに科学技術専門の工芸院附属技術博物館も設立された。つまり、国民公会は王室、

王族、教会のコレクションを、ルーヴル美術館を含めた4つの機関に再編成したのであり、美術館・博物館はこれ以後、制度化・専門化されるようになる。

しかし、民族誌に関するコレクションのための美術館・博物館をつくる動きはまだ見られず、ルーヴル美術館のコレクションと言えば、国民公会から第3共和制の初期にかけて、ギリシャ・ローマ時代、ルネサンス期、古典主義の作品を意味していた。

転機となったのは、古代エジプト学への関心の高まりであった。1826年、ルーヴル美術館の古代エジプト部門の責任者シャンポリオンが、最初の《非ヨーロッパ》部門であるエジプト展示室を設けた。翌年にはシャルル10世により、その他の遠い国々の作品を展示する博物館（Musée Dauphin）が開かれ、先に述べたように1943年、シャイヨー宮に移り海洋博物館となるまで、ルーヴル宮殿のなかに置かれた。さらには1919年、極東美術のための展示室がオープンされた。そして、1930年には「アジア美術部」が組織されるのである。

また、1843年、イラク北部モースルのフランス領事ポール＝エミール・ボッタが、イラク北部のコルサバードで古代アッシリアのサルゴン王の宮殿を発見し、その時発掘された彫像は、ルーヴル宮殿の「古代オリエン特美術の間」に展示されている（註8）。また、1828年、ジョイマールが王立図書館長に任命されると、同図書館の付属機関として、「地理－民族誌」博物館が計画されるが、同図書館とルーヴル美術館、自然史博物館の間の管轄権をめぐる争いにより、計画は実現されなかった（註9）。

その一方で1877年、アミー博士の要請により、「調査団の派遣、交換、あるいは購入によって入手された民族誌関係の物件を収集する」ための、「学術調査団による民族誌博物館」と命名される専門の博物館（後のトルカデロ民族誌博物館）の設立が決定された。そのため、1878年のパリ万国博覧会以降、再び空いていたトルカデロ宮殿が、1937年のパリ万国博覧会までの仮住まいとなり（註10）、そこには、ルーヴル美術館の「アメリカ考古学部門」などのコレクションの一部も移された。

また、1945年、極東のコレクションがギメ美術館の管轄下に入るなど（註11）、19世紀後半以降、ルーヴル美術館から、エジプトと中近東を除いた、《非ヨーロッパ》を出自とする所蔵作品が切り離されてゆく傾向にあった。

その一方で、19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリ、ベルリン、サンクト・ペテルスブルグの知識人やアーティストたちは、早くもアフリカやオセアニアの造形にインスピレーションを得て、創造の源泉としていた。20世紀初頭、とりわけパリでは、トルカデロ民族誌博物館の展示などを見て興味を抱いた一般大衆のあいだで、黒人アフリカ芸術は Art Nègre と称され、流行してゆく。

1920年、批評家フェリックス・フェネオンは、20人のアーティスト、民族誌家、写真家、探検家、美学者、美術商を対象に、Art Nègre をルーヴル美術館に入れるべきか否かを問い、答えは賛否両論だったが、実現には至らなかった。それに対し、1920年代以降、アンドレ・ブルトンを中心とするパリのシュルレアリストたちは、アフリカ芸術よりもオセアニアや

アメリカの芸術に着目するようになった（註12）。

その後、前に述べたように、フランスが植民地を失うと海外フランス博物館の存在理由がなくなったため、1960年、アンドレ・マルローは、ポルト・ドレの旧植民地博物館をリニューアルし、アフリカ・オセアニア美術館として、DMFの管轄下におくことにより、ルーヴル美術館をはじめとする他の国立美術館と平等の地位を与えようとした。

20世紀後半、Arts Primitifsは世界的潮流となつてゆき、1964年、パリの装飾美術館でも「アフリカ：100の部族—100の傑作」、1967年、人類博物館では「アーティストのアトリエのなかのArts Primitifs」と題する展覧会が開催されたことから明らかなように、アフリカやオセアニアの造形は「芸術」として、フランスでは完全に市民権を得たように見えた。さらには1989年、ポンピドゥー・センター内のパリ国立近代美術館では、人類学者や民族誌学者から助言を受け、西洋・非西洋から同数選出した作品を展示した「大地の魔術師」展を開催した。しかし、ルーヴル美術館は相変わらず、Arts Primitifsに対し無関心を装っているかのように見えた。

(2) ジャック・ケルシャシュ (Jacques Kercharche)

しかし、突如として、ルーヴル美術館にも改革の波が押し寄せた。1990年3月15日付の「リベラシオン」紙上に1つのマニフェストが掲載され、のちにセンセーションを巻き起こす。内容は「世界中の傑作が自由かつ平等に生まれるため、ルーヴル美術館に、第8番目のArts Premiers部門を設けることを強く勧める」というもので、提案者はジャック・ケルシャシュであった。この提言に多くの詩人、科学者、愛好者、アーティストたちが賛同した。そして、当時はパリ市長を務め、かね



図7 左：ジャック・ケルシャシュ 右：ジャック・シラク

てより「非ヨーロッパ」の文化に強い関心を抱いていたジャック・シラクもまた、この提案に深く共鳴し、1992年以降、両者は交流を深め、マニフェストの実現に向かって奔走するのである（図7）。

ジャック・ケルシャシュ（1942–2001年）は、Arts Premiersの収集家、美術商、鑑定家として知られており、1965年から80年までパリのセーヌ街でギャラリーを営んだのち、アジア、アメリカ、とりわけアフリカ大陸を好み各地を訪れた。また、「20世紀のプリミティヴィズム」展（1982年、ニューヨーク近代美術館）、「没後10周年記念：アンドレ・マルローへのオマージュ」展（1986年、ローマ、ヴィラ・メデイチ）、「ピカソーアフリカ」展（1995年、パリ、ポンピドゥー・センター）等、様々な展覧会に携わった。とりわけ「アメリカ大陸発見500周年記念：タイノ・アート」展（1994年、パリ、プチ・バレ美術館）は、ケルシャシュが監修しシラクが協力したことにより、大成功を取めた。

そして、前述したように1995年、ケルシャシュは、同年大統領となったシラクの発案で、彼の幼馴染でもあったジャック・フリードマンが委員長を務めた、Arts Premiersのための美術館建設を目的とする委員会の顧問に選出された。その導入として、ルーヴル美術館のパヴィヨン・デ・セッションに付属のギャラリーを設けることが決定した。このギャラリーは1,200平方メートルに120点余りの作品が展示されており、人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館の所蔵品を中心に、ポンピドゥー・センター、ピカソ美術館をはじめとする国内外の美術館の所蔵品や寄贈、新規購入から構成されており、その選択にあたりケルシャシュが助言を与えたばかりでなく、作品の展示にあたり、建築家ヴィルモットとともに中心的役割を果たした。

2000年4月13日、完成したギャラリーの開会式が行われ、ケルシャシュが、シラク夫妻をはじめとする来賓に対し案内役を務めた。

しかし、その翌年、ケルシャシュはメキシコで事故に遭い死去した。2003年、彼の妻アンやジャック・フリードマン、ジェルマン・ヴィアット、ステファヌ・マルタン、ジャン・ヌーヴェル等、彼と公私ともに深く交流した友人・知人16人による追悼文集が出版された。シラクは序文を担当し、そのなかでケルシャシュを「我が友」と呼び、あらゆる困難を乗り越え、彼の指導の下にパヴィヨン・デ・セッションのギャラリーが開設したと述べ、審美眼の確かさと信念の強さと寛大さを讃えた（註13）。

4. 結び；ジャック・シラクと《非ヨーロッパ》

以上から、2000年、ルーヴル美術館内のパヴィヨン・デ・セッションに続き、2006年、ケブランリー美術館が設立されるにあたり、これらの構想から実現に至るまで、ジャック・シラクの強い意志と、フランス共和国大統領としての政治力が関与していたことは明らかである。では、シラクと《非ヨーロッパ》を結ぶ懸け橋となるものは何だったのだろうか。

ジャック・シラクは1932年、パリの裕福な家庭に生まれ、名門ルイ・ルグラン高校からエリート官僚養成校の国立行政学院（ENA）に進み、独立運動が激化していたアルジェリアで兵役を経験しており、59-62年まで会計検査官を務め、62年から首相ジョルジュ・ポンピドゥーの官房に入り、国会対策担当相、農業・田園開発相、内相などを歴任した。74年の選挙で初の非ドゴール系の大統領ジスカールデスタンが誕生すると、首相に就任、共和国防衛連合（UDR）を創設し、76年首相辞任後共和国連合（RPR）を創設、77年にはパリ市長に選出され、95年大統領就任まで在職している。

シラクはパリ市長時代から、《非ヨーロッパ》芸術による美術館構想を抱いていた。彼は大の親日家であり、日本について「若い頃、ギメ美術館で発見した私の好きな国」と述べている。特に相撲好きで知られており、また、かつて日本で見た法隆寺の百済観音像の平穏な美に衝撃を受け、ルーヴル美術館所蔵のドラクロワ作『民衆を導く自由の女神』を日本に貸し出す条件として、ルーヴル美術館で百済観音像特別展が開かれるよう尽力し、

1997年、実現にこぎつけた。フランスの考古学者や日本研究者と親交があり、『万葉集』を「世界のなかで最も重要な文字作品のなかのひとつ」と評価し、その仏訳も入手しているほどである。

シラクはリセ時代、パリのギメ美術館に熱心に通い、日本を含む東洋の芸術に接したことによって、東洋の文化に関心をもち、その頃は特にインドに憧れていた。そして、サンスクリット語を学ぶために紹介され、やがて住み込みの家庭教師となったリトアニア出身の白系ロシア人ベラノヴィッチに、14-15歳頃、師事した。サンスクリット語習得は断念したが、その代わり彼からロシア語を学び、トルストイ、ドストエフスキー、プーシキンなどの書物を愛読し心酔した。ベラノヴィッチは数ヶ国語を話し、ロシア文学はもとよりペルシャ文明、中国芸術などに造詣が深く、自己形成期にあったシラクに「文化の多様性」を認識させた、重要な人物と言える。また、シラクは、「若かりし頃、暴力の犠牲となったマハトマ・ガンジーの死を知った時、その後遭遇したドゴールやポンピドゥーの死よりもショックを受けた」とも語ったほど、ガンジーに魅かれていた。

ではいつ、アフリカ美術に興味をもったのだろうか。それもやはり10代の頃で、1940年代末、自宅の近くに住んでいたキュビズムの画家フェルナン・レジェと知り合い、近代美術にも興味をもっていたシラクは、彼のアトリエに頻繁に通った。当時からレジェの芸術には、アフリカ、とりわけ西アフリカのマリ共和国のドゴン部族の影響が指摘されており、シラクもドゴン民族の文化を理解しようと試みたこともあった。

のちに政治に携わりながらも、フランス人の東洋学者、考古学者、先史学者、人類学者などと積極的に交流し知識を得た。とりわけ、クロード・レヴィ=ストロースの代表的な著作『悲しき熱帯』から、「啓示」に近い衝撃を受け、南アメリカの先コロンブス期の文明に夢中になるなど、シラクの関心は、先史時代から現代に至るまでのアジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアへと果てしなく広がっていった。

そして、政治家となったシラクに決定的な影響を与えた人物こそ、先に述べたジャック・ケルシャシュとの出会いだった。《非ヨーロッパ》の文明と芸術のための美術館である、ケ・ブランリー美術館創設は、シラクとケルシャシュの共通の目標となり、両者はそのための「同志的」関係となった。そして、2000年、念願かなってルーヴル美術館のパヴィヨン・デ・セッションにギャラリーを開設したが、それはあくまで通過点に過ぎなかった。「文化の対話」を具現化させようとしたケ・ブランリー美術館こそ最終目標であって、シラクにとっては『遺言』に等しい存在であったと、自ら述べている（註14）。

フランスにおいて、国家による文化政策が本格化するのには、ドゴールにより1959年、文化大臣に任命されたアンドレ・マルローからである。マルローは「文化の民主化」を目指し、フランス国民が平等に享受できるように、全国に文化会館（通称「文化の家」）の建設を推進した。また、1950年代、作家でもあった彼は『芸術の心理』や『空想美術館』など芸術に関する著作を発表し、日本文化にも深く親しみ、1974年には日本を訪れている。

続いてジョルジュ・ポンピドゥーが政権をにぎると、「あらゆる人々のための芸術と文化」を目指し、様々な形の現代文化や創造活動をパリの一か所に集めようとしてジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術センターを1969年に計画し、彼の死後、1977年に開館した。小学校教員の家に生まれ、高校教師を務めたこともあるポンピドゥーは豊かな教養をもち、現代美術の収集家でもあり、また、『フランス名詩選』の著者でもあった。

さらに1974年、シラクを首相に任命した大統領ヴァレリー・ジスカールデスタンは、名門の出身でENAを卒業した秀才であり、18世紀の家具・調度や歴史に造詣が深く、オルセー美術館を設立する計画をたてるが、財政難が原因で実現させることはできなかった。

その後、社会主義政権を確立したフランソワ・ミッテラン大統領も歴史に造詣が深く、文化大臣にジャック・ラングを起用しルーヴル美術館大改造をはじめ、パリのアルシュ（新凱旋門）、オルセー美術館、新オペラ座などの文化的建造物、さらには国立ミッテラン図書館、アラブ世界研究所をも設立するなど、国家予算の1%近くもの文化予算を用い大規模な文化政策を行っている（註15）。

このように第5共和制時代になると、歴代の大統領は積極的に文化政策を行い、それが大統領の資格であるかのように、教養人となるための努力を厭わず、ドゴール以降、追求し続けた「フランスの栄光」の象徴として国家的記念碑を建設してきた。パヴィヨン・デ・セッションとケ・ブランリー美術館は、彼らを強く意識しつつ、フランス共和国の歴史に自らの名を残そうとした、シラクの存在証明に他ならなかったのである（註16）。

註

- 1) ケ・ブランリー美術館の概要については、以下の文献を参照。『芸術新潮 特集：パリのびっくり箱 ケ・ブランリー美術館へ行こう！』2007年3月、新潮社、44-96頁、清水祐美子「パリのケ・ブランリー美術館を読むー開館記念会議録『諸文化の対話』を手がかりにー」（『クヴァドランテ・四分儀』11号、2009年、235-266頁、*Le guide du musée, Musée du quai Branly, Paris, 2006.* Hugues Demeude: *The Musée du Quai Branly*, Édition Scala-Musée du quai Branly, Paris, 2006. Armelle Lavalou, Jean-Paul Robert: *le musée du quai Branly*, Éditions le Moniteur- Musée du quai Branly, Paris, 2006.
- 2) *ibid.*, p.6-7.
- 3) フランスの美術館・博物館の歴史および種類については、ジャック・サロワ著・波多野宏之、永尾信之訳『フランスの美術館・博物館』[文庫クセジュ867]、白水社、2003年、9-108頁。
- 4) 植民地博物館、トルカデロ民族誌博物館については、以下の文献を参照。ジャン・キュイズニエ、マルティヌ・セガレン著・樋口淳、野村訓子訳『フランスの民族学』[文庫クセジュ719]、白水社、1991年、31-41頁、パトリシア・モルトン著・長谷川章訳『パリ植民地博覧会』、ブリュッケ、2002年。
- 5) Arts Premiersについては、以下の文献を参照。Marine Degli, Marie Mauzé: *Arts Premiers, Découvertes Gallimard, 2000.* シラクやケルシャシュは、アンドレ・マルローが言及したArts Primordiauxに示唆を受けて、西洋とは異なり文明化されていないという侮蔑的な意味あいを含んだArts Primitifsに替わり、Arts Premiersの用語を用いた。
- 6) ブランリー・プロジェクトについては、以下の文献を参照。Sally Price: *Paris Primitive, The University of Chicago Press, Chicago&London, 2007.* また、ケ・ブランリー美術館のプレス・リリースにも、簡潔に記述されている。

- 7) 黒人アフリカ芸術はArt Nègreと併用されつつ、20世紀初頭にはArts Primitifsと呼ばれるようになった。ウィリアム・ルービン編、日本語監修=吉田憲司、国府寺司、小川勝、真島一郎『20世紀におけるプリミティヴィズムⅠ、Ⅱ』、淡交社、1995年参照。
- 8) ジュヌヴィエヴ・ブレスク著・遠藤ゆかり訳『ルーヴル美術館の歴史』[知の再発見双書115]、創元社、1989年、95頁。Geneviève Bresc-Bautier: *Le Louvre, une histoire de palais*, Musée du Louvre éditions, 2008.
- 9) ジャック・サロワ、(註3)の前掲書、31, 33頁。
- 10) ジャン・キュイズニエ、マルティヌ・セガレン、(註4)の前掲書、31頁。
- 11) 実業家であり東洋学者のエミール・ギメ(1836-1918年)は、アジア全土に赴き、そこから重要なコレクションを持ち帰った。1888年、資料の主要な部分を、パリのイエナ広場に自費で建てた美術館に移し、そこを東洋文明についてのセンターにすることを望んだ。その全体が国に遺贈されたのは1928年である。ジャック・サロワ、(註3)の前掲書、32-33頁参照。
- 12) 大久保恭子『〈プリミティヴィスム〉と〈プリミティヴィズム〉』三元社、2009年、119-124頁参照。
- 13) sous la direction de Martin Bethenod *Jacques Kercharche, Portraits croisés*, Éditions Gallimard-musée du quai Branly, p.6-7, 2003.
- 14) シラクの生涯については、以下の文献を参照。Pierre Péan: *L'incnu de l'Élysée*, Éditions Fayard, 2006. 渡邊啓貴『フランス現代史』[中公新書1415]、1998年、296-325頁、軍司泰史『シラクのフランス』[岩波新書853]、2003年。
- 15) フランスの第5共和制の文化政策については、以下の文献を参照。Maryvonne de Saint Pulgent: *Culture et Communication*, Découvertes Gallimard, 2009.
- 16) 以上は主にシラクの精神的側面から見た考察である。それと同時に、ゴーリズムの時代以降、フランスのおかれた環境は激変しており、そのような外的要因が与えた影響についての論考は、現在準備中である。

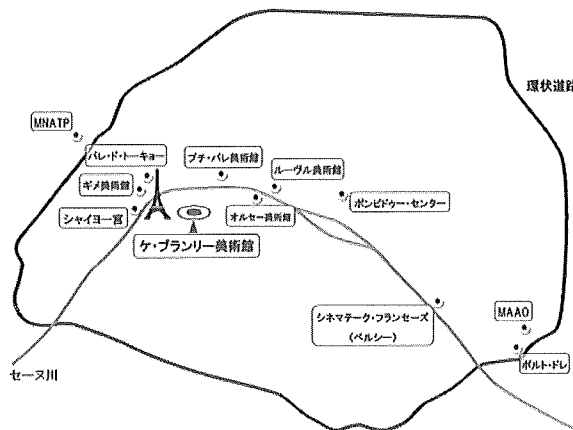


図5 本稿に記載したパリの美術館

A Study of President Jacques Chirac's Museum Project

Tomoko MATSUOKA

Collage of the Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2010)

The purpose of this study is to examine Museums in Paris that resulted from President Chirac's initiatives, set against a backdrop of personal and national politics.

The following issues will be approached : First, the musée du Quai Branly, which opened in June 2006 in Paris, which houses objects from 《non-European》 cultures, mainly from Africa, the Americas, Oceania, and Asia. Second, The Pavillon des Sessions which opened in April 2000 in the Musée du Louvre, which functions as a satellite of the Musée du Quai Branly. Third, Jacques Chirac's motives that led to the creation of the Pavillon des Session in the Louvre and the Musée du Quai Branly.